2021年2月28日佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書15章26節～16章4節

説 教 題：祝福の使命～問題の中で～

7 年前、東京で行われた「アナバプテスト･セミナー」に参加した際、「現代の殉教は、地方で福音を宣べ伝えることである」という言葉を聞きました。キリストの教会は、迫害の中で多くの殉教者を出して来ました。現代の日本に生きる私達には、殉教は遠い世界のことのように思われますが、「現代の殉教は、地方で福音を宣べ伝えることである」という言葉を聞いて、「皆で伝道の困難を担って行くことに大きな意味があるのだ」と新しい気付きを与えられたような気がしました。

さて、イエス様は15章18節から「迫害の予告」を語られますが、今朝の箇所では「その迫害の中でどう生きて行くか」、そのようなことを語っておられます。私達には、いわゆる迫害はないかも知れません。しかし、ここで「迫害」と訳されている言葉は「霊的な戦い」というニュアンスも持つ言葉です。私達にも、イエス様に従って行く上での信仰の戦い、霊的な戦いはあります。その意味で「問題の中をどう生きて行くのか」、そのように置き換えて考えても良いと思います。2つのことを申し上げます。

1： 問題の中で証しに生きる（15章26～27節）

イエス様は「迫害」をベースにして語っておられますが、26～27節で言われていることは「迫害の中で『助け主』なる聖霊を派遣する、その聖霊ご自身がイエス様について証しをされる」ということです。聖霊が証しをされるから、弟子達はどうすれば良いのかというと、弟子達もまた聖霊と一緒に証しをする、ということが言われているのです。つまり「迫害の中でどのように生きて行けば良いか」、「イエス様の証しをするように」教えておられるのです。27節の「あなたがたもあかしするのです」(27)は命令形です。「リビングバイブル」は「あなたがたもまた、わたしのことをすべての人に語らなければなりません」(LB27)と訳します。そして弟子達は、実際に、聖霊降臨の後、迫害の中で証しをして行くのです。

しかし、なぜイエス様は、「証しをしなさい」と言われたのでしょうか。もし「証しをしなさい」と言われなければ、彼らは静かに自分達の信仰を守って暮らし、迫害らしい迫害にも遭わなかったかも知れません。平安に生きて行けたのかも知れません。しかし、一方でどうでしょうか、彼らは信仰を持っていても何をして良いか分からない、勿論、天国に向かって生きては行ったでしょうが、それは弱々しい歩みではなかったでしょうか。しかし、彼らは「証しをしなさい」と言われ、証しをして生きて行きます。しかしそれは、決して重荷を負わされたということではないのです。そうではなくて、生きる目的、使命を与えられた、神の業に参加して行くという命のある限り無くなることのない生き甲斐を与えられた、ということも言えるのです。「自分は何のために生きているのか、生きていて何の意味があるのか」、そのように生きる目的を失ったり、自分で人生の価値を見つけ出す必要はないのです。元気だから、病気だから、若いから、高齢だから、幸せだから、辛いから、それも関係ないと思います。時が良くても、悪くても、その時、その時にしか知ることができない神様の御心があり、その時にしか伝えられない神様の恵みがあるのです。彼らは、その使命に生かされて精一杯、証しに生きるのです。そして、彼らの証しを、聖霊が助け、導いて行かれるのです。

「十字架で死んだ男は神だった」、受け入れがたい話です。なぜ、多くの人々が「十字架は私のため

だった、イエス様は神様だった」と告白して行ったのか。聖霊の働きだとしか言いようがありません。聖霊が人々の心に働かれたのです。

さらに言えば、彼らは、信仰が確立していたから証しをして行ったのではないのです。むしろ、証しをして行く中で信仰が育てられて行ったのです。証しをして行く中でイエス様に近づいて行ったのです。森繁昇さんも「伝える中で信仰が強くされた」と言っておられました。ある神学者が「どういうときに聖書がよく分かるか」、４つを上げています。神を求めて読む時、遜って読む時、従おうとして読む時、証しをしようとして読む時、その時に聖書が分かると言うのです。

何を教えられるでしょうか。イエス様のことを誰かに伝えようとすること、それは、恐らく信仰者に与えられたオプションではないのです。私達の信仰が鍛えられ、神に近づいて行くための、信仰生活の大事な一部分なのだと思います。私達は、誰かに信仰を伝えようとする時、どうするでしょうか。自分の力ではどうにもなりませんから、まず、その方の魂の救いのために祈るでしょう。誰かの魂を愛し心を傾けて祈る、そのことが既に私達をイエス様に近づけるのではないでしょうか。なぜなら、イエス様は人の魂を愛する方だからです。今、皆さんは、誰の魂を愛して、誰の魂のために祈っておられるでしょうか。私達も証しをする中で、私達自身が育てられて行くのです。証しをする中で神の業に参加していくことになるのです。聖霊の働きを経験するのです。そして、証しをしようとすると、自分の在り方が問われますから、自らの生き方も吟味されて行くのではないでしょうか。それがまた私達を、イエス様の弟子としてのあり方に向かわせるのではないでしょうか。そのような成長を、祝福を、イエス様は与えようとしておられるのです。

そして初めに、この個所は「問題の中の信仰生活」という捉え方も出来ると申し上げました。生まれたばかりの教会は、すぐに迫害されました。問題がやって来ました。しかし迫害によって潰されてしまうことはなかったのです。不思議なことに迫害があればあるほど、迫害をバネにするように広がって行ったのです。神は、彼らを助け、励まし、時には迫害の急先鋒パリサイ人パウロをキリスト教の伝道者にするというような大逆転も用意して、彼らを守り導いて行かれました。私達にも色々な―(迫害でなくても)―問題がやって来ます。時々、それは、私達の信仰を吹き飛ばしてしまうように思え、私達を沈み込ませたり、私達の力を奪ったりします。しかし弟子達は、聖霊の働きに信頼して、そして助けられ、乗り越えて行ったのです。私は、問題の中で聖霊の働きに期待することの大切さを教えられます。聖霊が働かれる時、辛く苦しい状況の中でも、私達には、状況に潰されない、むしろ問題の中で不思議な平安と希望が与えられる、そのようなことが起こって行くのです。聖霊の働きは、言葉だけではありません、現実の力です。信頼して行きたいと願います。

いずれにしても、イエス様は私達にも「あなたがたも証しをする」と言われます。問題の多い信仰生活ですが、私達には、生きる限りなくならない生きがい、生きる意義、目的が備えられています。色々な形で、色々な場で、イエス様のことを伝えることが出来ます。問題ばかり見つめるのではなくて、イエス様が下さっている使命、永遠の使命を見失うことがないように、積極的に生きて行きたいと願います。そして聖霊の働きを経験させて頂きましょう。

2：問題の中で神の支配を思う（16 章 1～4 節）

イエス様は、続いて 16 章 1～4 節で、彼らにどのような迫害がやって来るのか、具体的に予告されました。「ユダヤ人が彼らを会堂から追放する」ということ、さらには「イエス様の弟子を殺すことが

神に対する奉仕だと思う時が来る」ということを言われました。実際、そうなって行くのです。サドカイ人、パリサイ人は、「イエスを救い主とする新しい分派がユダヤ教全体を汚す、堕落させる、曲げて行く」と考えて彼らを滅ぼしてユダヤ教を守らなければならないと考えます。それが神への奉仕だと考えます。3 節にあるように「人を罪から救うためには、神の子が死ななければならなかった」ということが、「父なる神様と子なる神イエス様が、とてつもない犠牲を払って罪人に救いの道を造って下さった」ということが、彼らには分からないのです。そして、キリスト者を迫害したのです。パウロもその１人でした。彼は外国にいる者まで殺そうと思って信者を追いかけて行ったのです。そして復活のイエス様に出会ってキリスト教の宣教師になった途端に、今度は命を狙われる立場に立つのです。しかし、イエス様は「あなたがたがつまずくことがないために、これらのことを話す」と言われます。「つまずく」という言葉は、「不意打ちをくらう」という意味の言葉です。不意打ちをくらって、信仰から離れることがないように、これらのことを教えるのだと言われました。「クォ・バディス」という本の中で、ペテロが迫害の真っ直中にある時に言います。「かつて主は、私に『あなたが年をとると、両手をのばして、他の人に帯をしめられ、行きたくないところに連れて行かれる』と言われたんだ。だから、当然、こういうことが起こるんだ」。聖霊を受け、イエス様の御言葉で備えていたペテロは、迫害を通して、イエス様を近くに感じて行くのです。

ここから何を教えられるでしょうか。それは、迫害(問題)は、主の支配の外にはないということです。確かに、彼らに起こった迫害は酷いものでした。会堂から追放されるということは、村八分にされるということです。生きていくこと自体が大変な状況になるということです。でもエルサレムのクリスチャン達が迫害されてどうなったのか。彼らがエルサレムに居られなくなって散らされたことによって、キリスト教が広まって行くのです。その後、270 年間、キリスト教はローマ帝国によって断続的な迫害にさらされました。しかし、不思議なことに、迫害が起こる度に教会は鍛えられて強くなって行ったのです。なぜ、迫害の度に教会は強くなったかというと、恐らくそれは、クリスチャンが自分の信仰を曖昧にしておれなかったからだと思います。握りしめるか、捨てるか、決断を迫られます。その中で尚も神に期待して、神に自分を捧げていくか、神に失望して行くかが迫られるのです。そうやって１人ひとりが自分の信仰を問われて、神に対する信頼を新たにされて、教会は強くなって行ったのだと思います。そして、やがて教会は、大ローマ帝国をひっくり返して行くのです。

イエス様が「迫害がある」と言われたように、迫害がありました。なぜ、神は、迫害を許されたのか、それは分かりません。しかし、歴史の事実として、迫害が、信仰を広め、教会を強くしたのです。ある牧師が次のように書いておられました、「中国の教会も…共産主義の激しい迫害の中で…信者数を増やして来ました。一方、日本の教会はこの半世紀…平和と自由と豊かさに飼いならされて、教会勢力は沈滞しています」。そのようなことを思う時、迫害さえ、神の支配の外にあったのではないということを思うのです。フィリップ・ヤンシーというジャーナリストがチェスの名人と試合をして、次のことに気づいたのです。「こちらがどんな手を打っても、名人はそれを自分に都合の良い形にしてしまう」ということです。「神様がそれと同じことを為さる」と言っているのです。迫害は、悪の力が起こすものです。しかし神は、悪が打ってくる手を逆手にとって、信仰者の命がけの献身、証しを用いて、信仰を広め、そして信仰者を強め、教会を強めることが出来る方なのです。

私達も、誰かに伝道しようとする時、辛い思いをすることがあるかも知れません。そうでなくても、

信仰生活を送る中で、私達の信仰を打ちのめすような問題が襲って来るかも知れません。しかし大事なことは、何がやってきても、それは神の手の外にあるのではないということを確認することだと思います。信仰生活も、人生さえも、揺さぶるように見えることがやって来たとしても、そこで私達が、なおも神に信頼する時、それがやがて私達の信仰を強くするのではないでしょうか。

カナダにいる時、ロシアから移住して来られた方の体験を聞いたことがあります。ロシア、旧ソ連で、メノナイトは、信仰の故に迫害に逢ったのです。彼のお父さんも「秘密警察に連れて行かれ、帰って来なかった」と言いました。また、物資が奪われ、人が傷つけられて行きました。嘆き、悲しみは、どれほど大きなものだったかと思います。でもその方は、あくまで大らかに、時には笑みを浮かべながら、ご自分の話を淡々と語られました。私は、その方の中に「もうこの人の信仰は、何が来てもびくともしないだろうな」というようなものを感じました。また、実はその苦しみの中で、ロシアのメノナイトの人達は、伝道ということに目が開かれて行ったのです。それがやがては、メノナイト教会の海外宣教にも繋がり、北米からの宣教師によって私達の教会が建てられて行くことにも繋がって行くのです。苦しみはありました。しかし神様は、私達の苦しみを、苦しみだけに終わらせる方ではないのです。C.S.ルイスが「痛みの問題」という本の中で「苦しみや悲しみが信仰を強くするのであるなら、この世界は概してその仕事を良く果たしているように思われます」という趣旨のことを言っていたのを思い出します。問題の中で、証人として生きる時の困難の中で、そこにも添えられている神様の御手に信頼しましょう。

3：終わりに

今週も、私達は、問題の中を生きて行くかも知れません。しかし私達の傍らには、神がおられます。神の摂理に信頼して歩いて行きましょう。そして願わくは、私達も神の証人として、神が備えられた方々に神様のことを証し出来るように願いながら、生きて行ければ、と思います。